広がる支援

組織を超えた連携で町民の健康を守ってきた医療チーム

長期的な支援活動を行うボランティアの皆さん

い医療基盤の機能までも奪いました。

震災直後、国道や町道などいたるところでがれきが道をふさいでいました。そのため、けが人の搬送や物資の流通が困難な状態でした。町が山道に待機させていた豊間根地区の建設業者は、津波警報が解除されると重機で道を切り開いていき、崩落した道路には迂回路を作りました。このため、けが人などの搬送時間は大幅に短縮されました。

生きていく上で不可欠な水の供給は、水道施設の被災により途絶えていました。そのため県内市町村をはじめ、長野県、京都府、大阪府、兵庫県、秋田県の市町村職員が給水車で給水を行いました。また、水道は、3月20日に山田地区の一部で通水し、水道工事業者の夜を徹した復旧作業と県内外の自治体の応援により5月上旬にはほぼ復旧しました。

手当てを必要とするけが人が多数いる中、病院や診療所の多くが津波の被害を受けました。この危機的な状況で、町内診療所の医師らは、震災直後から山田南小学校避難所で薬剤師や看護師、事務スタッフとともに救護所を立ち上げ、不眠不休でけが人などの手当てに奮闘しました。その後、全国各地からたくさんの医療チームが続々と集まり、同避難所のほか県立山田高校などを拠点として、各避難所の救護活動を行いました。

また、医療調整会議を毎日開き、各チームの活動報告や感染症発生などの情報を共有し、対応について協議。組織を超えた連携で町民の健康を守ってきました。

ボランティアセンター集まる全国からの善意

震災直後から、被災した住民の力になりたいと、たくさんの皆さんが支援のため町内で活動してきました。

4月9日には、山田町B&G海洋センター体育館を拠点として、山田町災害ボランティアセンターが開設。山田町社会福祉協議会とNPO法人「大雪りばぁねっと」が中心となり運営に当たっています。

センターでは、ボランティアが円滑に作業できるように手助けを必要とする人とのマッチング作業を行っています。ボランティアは全国各地から集まり、多い日で300人以上となりました。また、交代でボランティアに参加し、長期的な支援をしてくれる自治体や企業などもあります。

作業内容は▼土砂の撤去▼写真の洗浄▼家具の移動、畳上げ▼掃除、食器等の洗浄▼避難所・炊き出し補助――など。特に、がれきや土砂が流入した家の片付けでは、泥水を吸って重くなった畳や軒下にたまった土砂なども「せーのっ」と声を合わせて運び出すなど、作業に汗を流します。

また、思い出のつまった貴重な写真の洗浄作業も仕事の一つ。流出したがれきの中から見つかった写真やアルバムを、ボランティアの皆さんはていねいにハケで汚れを落とし、きれいな水でやわらかく洗浄。そして、直接日光に当たらない場所で保存します。ボランティアさんがきれいにし、持ち主へと戻った大切な写真は、これまでで数千枚にものぼります。

ボランティアの皆さんが各分野で力を発揮し、沈んでいた気持ちを少しずつ希望のあるものへと変えてくれました。被災から復旧・復興へ向け、町民自身の力はもちろんのこと、たくさんの方々の支援が、最初の一歩を踏み出す力となっています。

①人力車に乗り、喜ぶ子供たち（5月5日）②大浦出身の小林すずさんが所属するわらび座が大浦小で公演（7月30日）③熱い応援ソングにみんな勇気づけられたファンキーモンキーベイビーズのライブ（6月19日）④保健センターで行われた航空自衛隊の演奏会（5月27日）⑤柳沢地区国道沿いに建てられた感謝を伝える看板⑥大沢小で笑顔を見せるラサール石井さんと子供たち（4月11日）⑦みんなを笑顔にさせた山田邦子さんの訪問（5月26日）⑧御蔵山で開かれたさだまさしさんのコンサートに涙と笑顔があふれた（8月17日）